

在宅ホスピス医の草分け的存在の川越厚さん(77)が、広島で被爆した父の後半生をたどる『ヒロシマ遡上の旅』(本の泉社)を出した。生き残った被爆者の苦しみ在宅ホスピス医の視点から寄り添い、被爆2世の立場から語り継ぐ。世界で核の脅威が改めて問われる中、「核兵器は決して使ってはならない」と語る。

川越さんは広島育ちで、東京大医学部を卒業後、婦人科がんの専門医などとして勤務。39歳で自らも大腸がんを患ったのを機に、1989年に在宅ホスピス医として活動を始めた。現在は山梨県北杜市を拠点に在宅医療に携わっている。

父研三さんは爆心地から1・3キロの地点で被爆し、がれきの下敷きとなって九死に一生を得た。郊外にいた母静枝さんは数日後に広島市に入り被爆した。「僕は被爆2世としての『原爆の原風景』を持っている。

「あの日」からの父 30年の苦しみ

在宅ホスピス医として被爆者に寄り添う ■「2世」として語り継ぐ

被爆1世が減った今、ヒロシマと向き合い語り継ぐことが終活だと思った。父子ともにクリスチャンであり、「弟子がイエスの言葉を伝えた福音書のように、被爆1世の体験を2世の僕が次世代に伝えたい」。

だが、生前父が語った被爆者の様子は「ぶつうのひとが、ようけ死んどうた」というわずかな言葉だけ。母が書き残した日記を参考に、2023年8月24年8月に5回広島を訪れて父の足跡を追い、関係者に話を聞いた。父の8月6日を追体験した上で、感じたことをつづった。

軍人だった父は瀕死の被爆者たちを前に、ただ避難誘導に当たったほかに、△絶望的なもどかしさを父は感じていたに違いない▽。戦後しばらく、父はしばしば夜にうなされ、毎年8月6日には広島を離れた。父は1974年に亡くなるまで約30年も原爆の記憶に苦しみ続けたいです」



「自分がいかにヒロシマについて知らないかを痛感しました」と語る川越厚さん(東京都立川市で)

戦後30年

「被爆者にはケアと時間が必要
語らなかつたのではなく
語れなかつたと気づいた」

本書の特色は患者と家族を一体として考え、患者の死後も遺族をケアする在宅ホスピス医の考え方に貫かれていた点だ。「大切な人を看取った遺族が立ち直るには十分なケアと時間が必要だ。広島の人々の多くが長らく被爆体験を語りなかつたのは、悲惨な体験をしたためにケアと時間が必要だったから。語らなかつたのではなく語れなかつたんだと気づきました」

「遡上の旅」を通じ、新たな課題も見いだした。医師会に残されたカルテなどを集め、被爆直後に医師

川越厚さん 「ヒロシマ遡上の旅」刊行

たちがどう行動したか全体像を捉え直すことだ。「カルテを見ると医師も初めは戸惑っていたことがわかる。医師の立場で原爆を見ていく必要があると思っただ」

あとがきに、原爆は八咫魔の兵器だと記憶し、後世の人に伝えていくのがわたしたち被爆2世の使命だ」と記した。今夏に本書を英訳出版する計画も進めている。「被爆2世の僕もほとんどヒロシマを知らなかつた。広く世界に知ってもらわなければならないんです」

(文化部 武田裕吉)